

教育ネットワークの構築方法に関する一考察

—指導主事の職務を通して—

小林 祐一（東京都北区教育委員会）

1. はじめに

教職大学院を修了して3年が経った。その間、指導主事としての職務を通して、多くの教育に携わる方との出会いがあった。「え、あの人が知っているの?」「世間は狭いねー。」「その分野なら、この人を紹介するよ。」一會話は弾み、名刺の交換だけでは収まらないほどのつながりができた。

学校教育の現場と同様に、教育行政においても、多様な分野で活躍する専門家の力を借りることが求められている。自己の経験では、講演会や研修会、新規事業が「成功した」と感じるのは、講師に力を借りるだけではなく、相互作用を通してより良いものが創造できた時であった。そこには、要因、コツ、哲学のようなものがあると考えられる。それらが何か、本稿で追究していきたい。

現在、多くの修了生が教職大学院での学びを生かして活躍しているが、課題研究や講義・演習で学んだ「知」を実践の場で検証することの意義は大きい。私は、教職大学院のテーマである「協働」を意識して指導主事の職務に臨んできたが、教育ネットワークの構築方法について省察することで、修了生としての責務の一端を果たせれば幸いである。

2. 研究の目的

教育ネットワークの構築方法については、様々な先行研究があるが、指導主事が自らの職務を通して考察したものは少ない。そこで本研究を仮説生成型の研究と位置付け、その目的を「指導主事にとっての効果的な教育ネットワークの構築方法に関するモデルを提示すること」と設定する。

3. 研究の方法

（1）ホリスティックなアプローチによる省察

私は、教職大学院において ESD の普及に関する実践研究を行った。そこで、多様な人々との関係性を広げ、深めるための手法として、ホリスティックなアプローチの有効性を見出した。本研究では、ホリスティックなアプローチのキーワード⁽¹⁾【①つながり（関係性）②つりあい（均衡性）③つつみこみ（包括性）④つづける（持続性）】について批判的に検討することで、教育行政における教育ネットワークの構築方法を考察する。

研究の方法としては、私自身を実践者として位置づけ、メタ認知することで自己及び自己との関係性を省察する手法を用いる。質的な研究の中でも、オートエスノグラフィーに位置づけられよう。⁽²⁾ なお、ネットワークの形成過程については、4 象限図を活用し、関係性を簡略した図を用いて分析する。

（2）マネジメントプロセス分析の活用

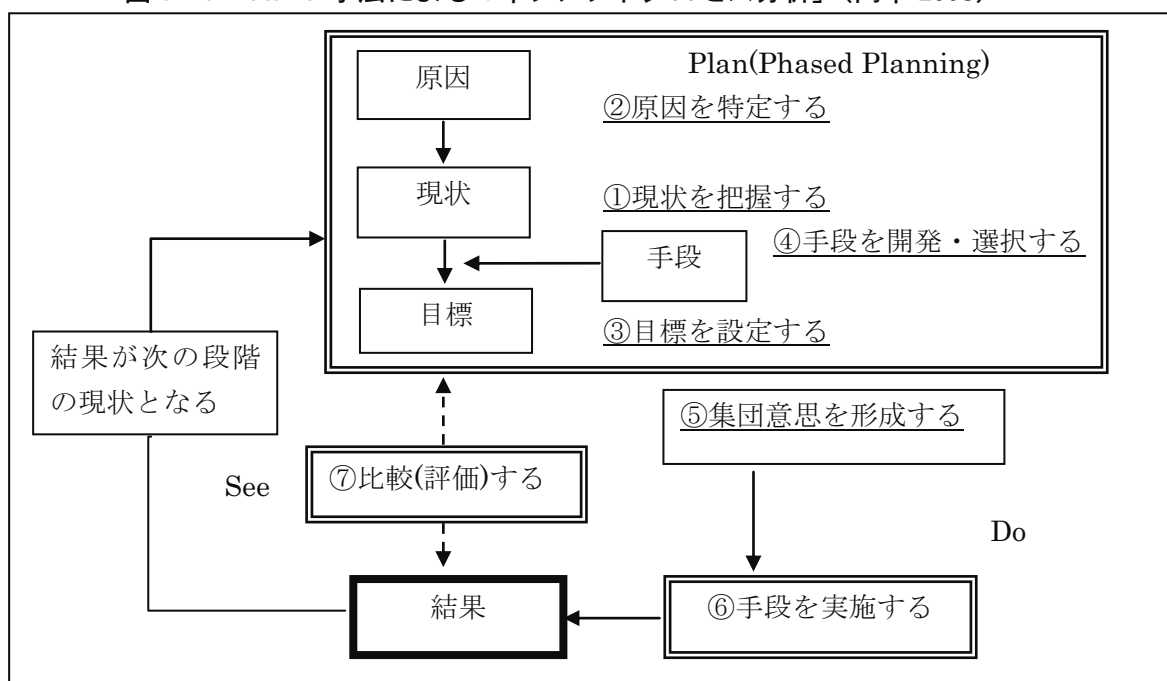
教育ネットワークは、それ自体が目的となり得るものであるとも考えられるが、本研究

では、目的を達成するための手段として位置づける。なぜなら、私が属している部署が教育政策課であり、職務の第一が「教育施策の推進」だからである。どのような事業にも目的があり、手段がある。ここが明確にならないと、何のための教育ネットワークなのか混乱が生じる怖れがある。

しかし、新たな教育ネットワークの形成によって、想定外の可能性が広がる場合が多々ある。よって、第一次的な分析の手続きとしては、教育行政におけるマネジメントプロセスに沿うこととし、副次的に生じたものについては、関係性の形成過程において考察する。

分析事例については、マネジメントの段階（Plan・Do・See）に即して考察するが、教育ネットワークの形成は「Plan」の段階が密接に関わると考えられるため、Plan を5段階のフェーズにした Ph. P 手法を用いる。

図 1-1 「Ph. P 手法によるマネジメントプロセス分析」（岡本 2008）⁽³⁾



（３）事例の選定—区民公開講座の企画・実践

あらかじめ目標や手段が決定されている場合、ネットワーク形成の自由度はある程度限定されるものと考えられる。逆に、すべてが未決定の場合、自由度は高まるが、ネットワーク形成の可能性が大きく広がり、分析に多大な労力が必要となる。そこで本研究では、上位の目標は決定されているが、企画の段階においては自由度の高い事例を選択する。

北区教育委員会では、教育振興基本計画である「北区教育ビジョン 2010」を策定し、その推進を図っている。教育政策課は、「北区教育ビジョン 2010」の推進役の一翼を担っており、区民に向けての広報活動をしている。平成 23 年度には、「北区教育ビジョン 2010」の周知を目的とし、3回の区民公開講座が企画・実施された。

本研究では、区民公開講座が企画・実施される過程を事例とすることで、どのようにネットワークが形成されたのかについて分析する。

4. 事例の考察

(1) 企画の前段—区民公開講座の位置づけ

北区には、教育政策課が所轄している教育に関するシンクタンク機能を有する教育未来館という施設・部署がある。平成 21 年度には、元都立日比谷高等学校長である長澤直臣氏を名誉館長に迎え、地域・保護者向けの講演会を実施した。

平成 22 年度は、長澤直臣氏をメイン・シンポジストとし、6 回の区民公開講座を実施した。テーマは、「親子で考える学びと生き方」とし、進路選びについて参加者とともに考える形式とした。ゲスト講師には、長澤氏の縁で依頼した公私立の学校長や塾関係者、大学教授などを迎え、活発な議論が展開された。

平成 23 年度は、長澤氏の豊富な経験を生かし、「北区教育ビジョン 2010」の広報活動となるような講座を実施することになった。しかし、ここで課題となったのがゲスト講師の選定とテーマの絞り込みである。これまで、長澤氏のネットワークから講師を選定していたが、企画自体が全くの白紙からのスタートになったのである。結果として、下欄の通り、公開講座を企画することになったが、実施に至るまでには相当の困難があった。

平成 23 年度 北区教育未来館名誉館長公開講座

※企画決定後のメモ

学校・家庭・地域で考える学びと生き方

① 目的 学校・家庭・地域が共に子どもたちの学びと生き方について考える機会を提供することで、地域・保護者・教職員の交流を促すとともに、学校ファミリー構想をはじめとした北区教育ビジョンの理解促進を図る。

② 内容 地区ごとに「北区の教育が目指す子どもの姿（北区教育ビジョン 2010）」と関連したテーマを設定し、名誉館長とゲスト、参加者がシンポジウム形式で語り合う公開講座

③ 日程・テーマ等

	開催日	テーマ・講師
第 1 回	10 月 8 日(土)	「自ら学ぶ子どもを育てる～地域で支える学校図書館の可能性」 対崎奈美子氏（前全国学校図書館協議会事務局長） 成田喜一郎氏（東京学芸大学教授） 鈴木明雄氏（北区立飛鳥中学校長）
第 2 回	12 月 3 日(土)	「未来を拓く子どもを育てる～学校・家庭・地域で創る学びの場」 笠松雅弘氏（福井県立こども歴史文化館長）
第 3 回	2 月 4 日(土)	「地域に貢献する子どもを育てる～東日本大震災から学ぶ」 野沢令照氏（仙台市立小学校長：前仙台市教育次長） 永嶋昌博氏（北区立桐ヶ丘中学校長）

※教育委員会各課や PTA と連携し、多くの区民・教職員が参加できるようにする。

※地区ごとに小テーマを考えてもらい、地区の課題に対応した内容とする。

（２）事例：区民公開講座「地域で支える学校図書館の可能性」

区民公開講座を企画するにあたり、内容の絞り込みが必要となった。今回の公開講座は区民向けということもあり、「北区教育ビジョン 2010」に掲げられている「北区の教育が目指す子どもの姿」に注目することにした。⁽⁴⁾

ここから講師の選定になるのだが、その条件を、①北区とのかかわりがあること②北区の教育課題の解決に適していること③実現可能なこと—の３点とし、まずは関係者の教育ネットワークから探ることにした。北区の元学校長、区教育研究会の講師経験者、教育関連検討委員会の経験者等の名前を並べていく。同時に、それぞれの専門分野を記し、「北区教育ビジョン 2010」との接点を探す。これらの作業は、Ph. P 手法によるマネジメントプロセス分析の前段のフェーズであるとも考えられる。優先順位や実現可能性を加味して、複数の講師を候補に挙げることができた。

結果として、私が教職大学院でご指導いただいた成田喜一郎氏にお願いすることになったのだが、選定条件については以下の通りであった。

選定条件	成田氏のプロフィールなど
①北区とのかかわり	北区の小中合同授業研究会における講師経験有り
②北区の教育課題	ESD、中学校社会科、組織マネジメント、学校図書館の活用
③実現可能性	日程の調整が合えば

特に①は、大きな意義があった。北区では、重要施策として「学校ファミリー構想（中学校区を単位とした学校園のネットワーク）」「学校ファミリーを基盤とした小中一貫教育」を推進しており、その施策に関わった経験があることで、事務局内においても最適任の講師として共通理解を得ることができた。

次に②であるが、「北区教育ビジョン 2010」において「学校図書館の活用」が教育課題として挙げられていた。成田氏の専門性と合致しているために、「学びを暮らしに生かす力」を育む手段として「学校図書館の活用」を位置づけることにし、ようやく公開講座の見通しを得るに至ったのである。（※資料 1 参照）

以下、Ph. P 手法によるマネジメントプロセス分析のフェーズを考察する。

① 現状の把握

学校図書館の活用については、効果的に活用されている学校がある一方で、なされていない学校もあり、学校間によって差がある。中学校においては、全般的に厳しい現状である。

② 原因の特定

どの学校にも専門性の高い学校図書館担当者がいるわけではない。担当者が学校図書館にかかわる時間等の条件が十分に整備されていない。図書館司書は配置されていない。学校図書館ボランティアは盛んだが、学校との連携に課題がある例もある。

③ 目標の設定

現状を把握し、原因を特定したが、目標の設定については、手段の開発・選定の実現性ともかかわってくる。実現困難な目標を設定しても、行き詰ってしまう。そこで、第一の目標を「北区の成功モデルを立ち上げること」にした。早急に課題を解決し、方策化することは難しいと考えたからである。そして、第二の目標を「成功モデルを、北区全体に広げること」とした。

④ 手段の開発・選択

中長期的な視点も含めて、以下の3点を考えた。そして、区民公開講座を目標に迫るための契機と位置づけた。

- i 研修会の充実（教育指導課）
 - ii 学校ボランティアとの連携（学校地域連携担当課）
 - iii 環境整備（教育委員会事務局全体）
- } 区民公開講座をきっかけに

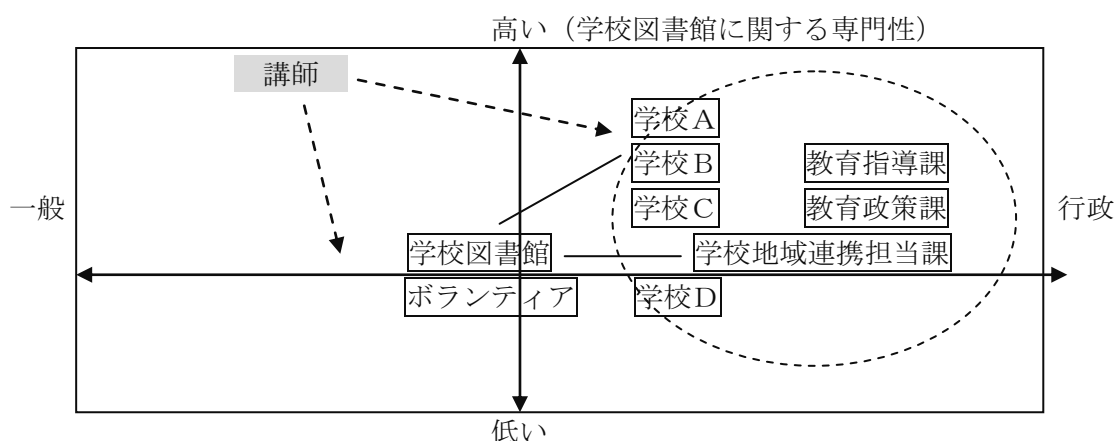
区民公開講座を「効果的なきっかけ」にするためには、参加者の絞り込みをする必要がある。広く一般区民向けの講座ではあるが、「必ず来てほしい人」が参加する仕掛けづくりが重要となる。PTAの会合や自治町会の会議でPRし、チラシを配布したり区の広報誌で宣伝したりしたが、だれが来るのかは未知数で会った。

そこで、学校図書館ボランティアを管轄する「学校地域連携担当課」に公開講座の共催を打診することにした。双方の思いが合致し、共催となり、学校図書館ボランティアの方も参加することになった。

次に、教育委員会（事務局）の参加についてだが、幸いなことに教育委員をはじめ、各部課長からの関心は高く、多くの関係者の参加が見込まれていた。施策の実現のためには、事務局内の共通理解が必要であるため、関係者の参加の意義は大きい。

最後に、学校関係であるが、土曜日の開催ということもあり、参加を促すことは難しかった。しかし、ここで、偶然であるが、成田氏と北区の中学校長である鈴木氏がつながっていたのである。鈴木氏は、荒川区の教育室長時代に学校図書館の活用を推進した経歴があり、鈴木氏の学校（飛鳥中学校）との接点生まれ、教職員、保護者とのつながることができた。図2は、企画段階におけるネットワーク図である。点線の囲みは、今後想定されるネットワーク、点線の矢印は、「きっかけ」の影響を表している。この図は、集団意思の形成、手段の実施を経て変容していくのだが、それは後に述べる。

図2-1 公開講座関連のネットワーク



さらに、成田氏から学校図書館活用について現場経験の豊富な対崎氏を紹介していただくことになった。公開講座の講師、目標、参加者、見通しが定まり、いよいよ実現へ向けての作業となった。

⑤ 集団意思の形成

i 事務局内

事務局内においては、①～④の過程そのものが集団意思の形成過程である。大きな目標である「北区教育ビジョン 2010」の周知・推進を念頭に、所轄課長、名誉館長との打ち合わせ、関連各課との打ち合わせを定期的に行うことで、共通理解を図った。

ii 公開講座参加者（シンポジスト）

公開講座の大まかな柱や議論のテーマの決定については、事前の打ち合わせが重要である。担当者として聞き取りを行い、議論を重ねる中で、新たな発見がある。成田氏からは、学校図書館の ESD における可能性や「対話」の意義、対崎氏からは、全国の先進的な取り組みやボランティアの活動などを伺うことができ、打ち合わせを通して「北区の教育が目指す子どもの姿」を具現化するための新たな視点をもつことができた。

打ち合わせを経て、それぞれの役割を決めていき、シナリオづくりになるのだが、完全なる「台本」としないことが重要である。会場の参加者とのやりとりや当日の雰囲気によって、想定外の出来事が起こる可能性がある。

【目標の設定の修正】

ここまで来ると、公開講座に限定した目標が見えてくる。当初の目標を修正し、「きっかけ」から、具体的な到達点を意識できるように考えた。

ア 参加者の満足度…教育関係者、学校図書館ボランティアのニーズを満足させる。

イ モデルの実施 …鈴木氏の中学校において展開する。

ウ 施策の実現 …先進事例のいくつかを実現する。

⑥ 手段の実施

かくして、公開講座が行われた。一般区民も参加するため、できるだけ堅苦しい雰囲気にならないように心掛けた。各シンポジストの入場時にはテーマ音楽をかけ、テレビ番組さながらの演出により、会場の参加者との距離が縮まるように工夫した。また、内容についても、クイズを挟みながらも北区の施策に引き込むように問題を考えた。長澤名誉館長が質問し、ゲストが答える形式で進めた。

第1回 「地域で支える学校図書館の可能性～自ら学ぶ子どもを育てる」		
メイン・シンポジスト	長澤 直臣 氏（北区教育未来館名誉館長）	
ゲスト・シンポジスト	成田喜一郎 氏（東京学芸大学教職大学院教授）	
ゲスト・シンポジスト	対崎奈美子 氏（東京学芸大学講師、前全学図協事務局長）	
ゲスト・シンポジスト	鈴木 明雄 氏（北区立飛鳥中学校長）	
進行	小林 祐一（教育政策課）	
	内 容	詳 細
1	教育自論	各1分で、本テーマに関連した持論をスピーチする。
2	数字で読む ☆教育事情	「北区教育ビジョン 2010 に係わるアンケート調査」からクイズ ① 学校図書館をよく利用しているか。 ② 家庭でどの程度自発的に勉強していると思うか。

3	先進事例から学ぶ	①学校図書館の利用状況について ・対崎氏：全国調査・A区の例 ②読書と学力とのかかわり ・対崎氏：学校図書館活用の事例 ・成田氏：新学習指導要領とのかかわりなど ③学校と家庭・地域の連携に果たす学校図書館の役割 ・対崎氏：学校支援ボランティアとしての学校図書館ボランティア課題 ・成田氏：学校の現状、課題を乗り越える「対話」 —最後のポイント、北区に引き寄せて ④学校ファミリー、小中一貫教育との関連 ・対崎氏 児童・生徒交流の例など ・成田氏 世代を超えた地域や家庭とのつながりへ ・鈴木氏 <u>北区としての取り組みと可能</u>
会場からの声		休憩時間中に、付箋氏に意見・質問を記入する
4	明日へのアクション・ワーク	○ボードに分類された意見・質問について、各自が答えていく。 ○最後に、各自からメッセージ ・対崎氏：地域と家庭で支える学校図書館の役割とその可能性 ・成田氏：これからの子どもの学びと学校図書館の在り方 ・鈴木氏：北区の学校ファミリーや小中一貫教育との関連 ・長澤氏：学校改革、学力向上への取り組みについての今後の方向性について、会場とともに考えることができた

図3 意見・質問ボード

一般・全国的視点			
対崎先生			成田先生
<u>実践派</u>			<u>理論派</u>
鈴木先生			長澤先生
北区での視点			

⑦ 比較（評価）

ア 参加者の満足度

参加者の満足度を把握するため、事後アンケートへの回答を依頼した。4段階の満足度については、100%の肯定的評価を得られた。参加者の分類は、保護者、教育関係者、北区民と多様であった。それぞれの視点で肯定的な回答を得られており、第一の目標は達成されたと考えられる。

自由記述の感想は、以下の通りである。

- ・「魅力的な学校図書館にしよう」「教科の中で積極的に学校図書館を利用しよう」とやる気が出ました。
- ・図書ボランティアへの意欲が増しました。
- ・いろいろな理念を学ぶことができました。その中での図書館のあり方、教育について考えさせられます。図書ボランティアとして、まず活動するという自己実現している充実感を味わいつつ、できることをやっていきたいと思います。
- ・学校図書館ボランティアをはじめる時は、子どものためでしたが、今回の話を聞いて自分のために出来るだけ長く続けることが出来たらいいなと思いました。それが、未来の子どもたちにつながる事を願います。

イ モデルの実施

鈴木校長を中心に、飛鳥中学校で学校図書館ボランティアが立ち上がった。北区における中学校では、初の試みである。また、そればかりでなく、近隣の小学校との連携も強化し、学校ファミリーとして学校図書館活用を推進することになった。

区民公開講座だけが要因ではないが、きっかけの一つとなったことは、当初の目標を達成できたとも考えられる。

ウ 施策の実現

もともと、集団意思の形成において課題があった。参加者には教育関係者や行政職員もいたのだが、施策の実現までには至らなかった。

また、原因として挙げた課題を解決するための研修については、翌年、教育指導課の学校図書館研修会を企画したが、積極的に学校図書館ボランティアの連携を強化するには至らなかった。

(3) 考察

これまで、マネジメントプロセスの各フェーズにおいてネットワークの形成過程を考察してきた。ここで、ホリスティックなアプローチのキーワードを省察し、効果的なモデルを見出したい。

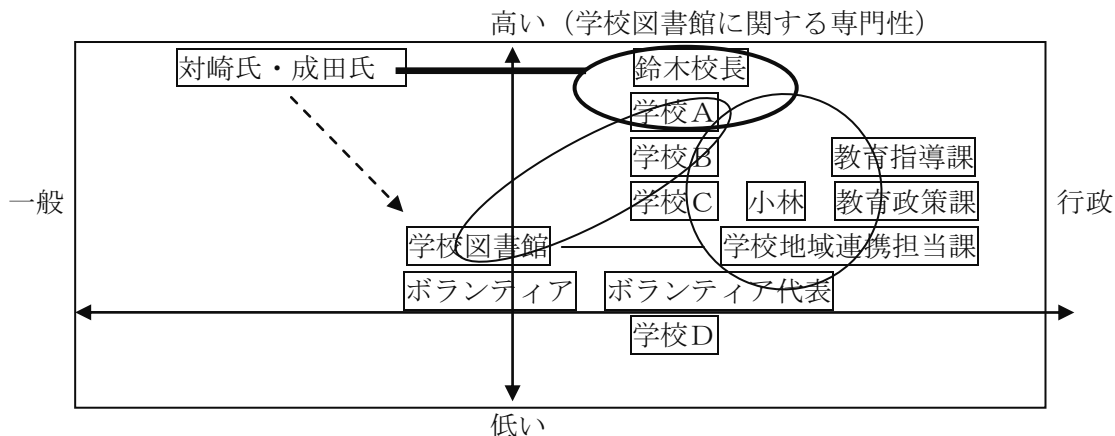
(i) つながり（関係性）

当初予定していたネットワークとは別に、新たなネットワークが形成された。それは、事業の企画・実施の過程において形成されたと考えられる。

一連の流れから、以下のようなネットワークが形成されたのだが、ところどころでキーパーソンとなる人物がリードしていた。とくに、公開講座に参加した図書館ボランティアの方々が、鈴木校長を中心とする学校図書館ボランティアを推進した。

また、行政においても、学校地域連携担当課との連携が生まれ、私が研修会の講師を担当することができた。そこから、ボランティア代表の方ともつながることができ、学校図書館のみならず、学校とボランティアをつなぐための「きっかけ」をつくることができた。

図 2-2 公開講座関連のネットワーク



(ii) つりあい (均衡性)

本事例における教育ネットワークの関係は、縦の関係でもなく、フラットな関係でもない。それぞれに立場や専門性があり、互いにリスペクトするからこそ、ある議論では一方に耳を傾け、ある議論では他方に耳を傾ける。これこそが、「つりあい」の意味ではないだろうか。だれにでも、強みと弱みがあり、それが、ネットワークの形成の際にカギとなる。打ち合わせ時、集団意思の形成過程、公開講座でのディスカッションなど、一方通行的な伝達ではない、相互作用による創造が生まれるためには、「つりあい」というキーワードは欠かせない。双方にとって互恵性のある関係性が、効果的なネットワーク形成のために必要であろう。

(iii) つつみこみ (包括性)

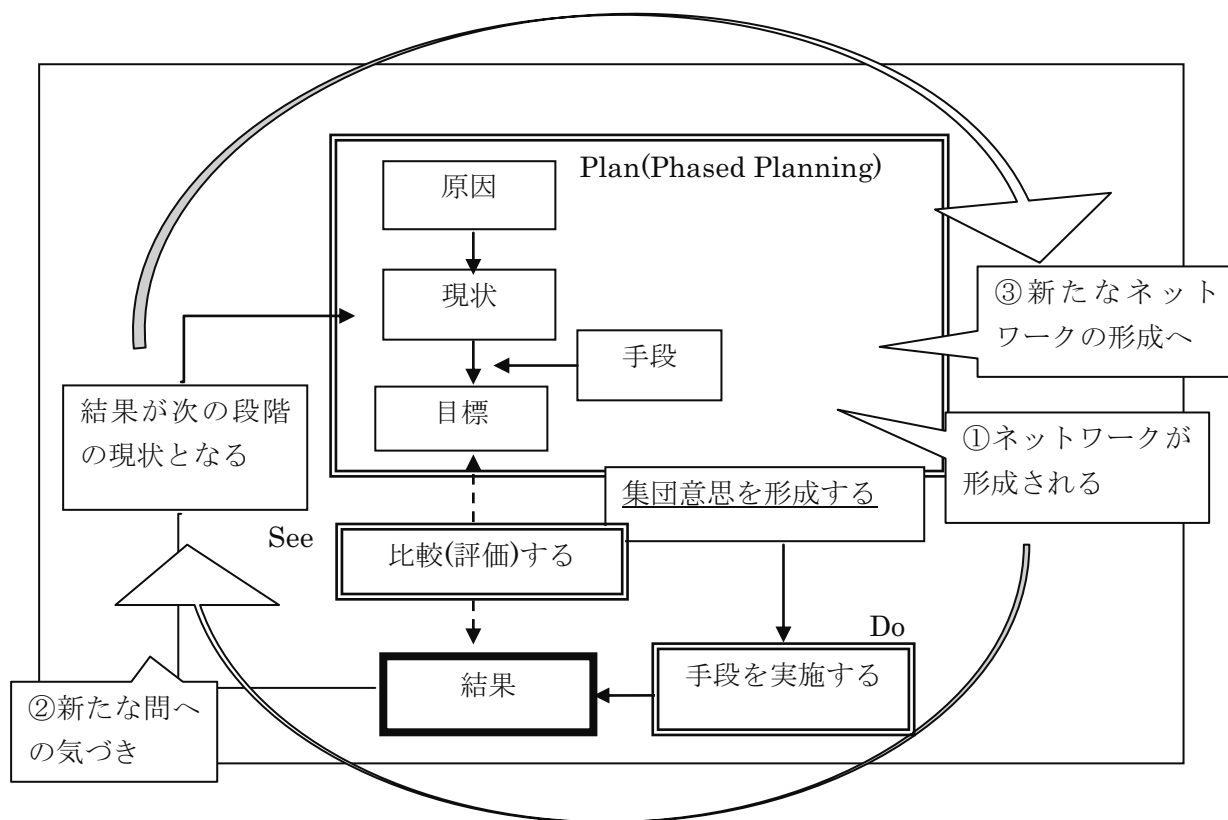
それでは、「つつみこみ」の概念は、どう解釈できるだろうか。いつでもつながれる、意識でつながっている、価値観の共有がなされている—協働の土台が形成されたイメージが「つつみこみ」である。ネットワークが広がるとともに、価値観は多様化するが、それらの価値観が共有され、「つつまれる＝包括される」ことによって、協働のイメージが生まれる。

(iv) つづける (持続性)

続けることの意義は、マネジメントサイクルからも見出せる。(※図1-2参照)

「比較」において、「結果」が生じ、それが「次の現状」となる。ならば、PDS のサイクルを経て、改善への営みが絶えることなく続くことになる。これは、ESD の理念に近い。持続可能な教育は、完成して終わりではなく、絶えず更新されることが重要である。その過程において、教育ネットワークが形成され、生かされ、協働のベースとなり、さらに活用される……。新たな教育ネットワークの形成が、異なる教育課題への気づきとなり、手段となる。つづけることによって、教育への根源的な問が生じ、解決への営みが繰り返される。

図 1-2 「Ph. P 手法によるマネジメントプロセス分析」
 —その持続可能性とネットワークの広がり（吹き出しのコメントは小林が作成）



5. おわりに

本稿では、一事例の考察であったが、教育行政におけるマネジメントの過程において、教育ネットワークが形成されていくことが分かった。他の事例においても検証することで、より良いモデルを構築していきたい。

修了生がどのように教職大学院での学びを還元できるのかについては、未だ模索中と言わざるを得ない。実務を通じて研究を実践する、どこまでできるのかが問われているが、今後も継続していきたい。

【注】

- 1 成田喜一郎氏は、「学校教育」の文脈に沿った全人・全連関的な概念としてのホリスティックなアプローチを、「ホリスティックなアプローチとは、子どもたちがあらゆる人間（じんかん）・時間・空間・事物・情報・精神と『つながり（関係性）』『つりあい（均衡性）』、そして、それらを『つつみこみ（包括性）』『つづく／つづける（持続性）』ことによって、知性と心性・身体性を拡張・深化させ、自他の「生／死」への問いと有意味性を引き出す営みのことである。」と定義している。／成田喜一郎（2013）「ESDにおけるホリスティックなアプローチの可能性」秋田市立秋田商業高等学校ビジネス実践・ユネスコスクール班編著『ユネスコスクールによる ESD の実践—教育の新たな

な可能性を探る』アルテ、p. 182 より引用。

- 2 成田喜一郎 (2013) 「子どもと教師のためのオートエスノグラフィーの可能性―「創作叙事詩・解題」を書くことの意味―」『ホリスティック教育研究』2013 年第 16 号 pp. 1～16 参照。
- 3 岡本薫 (2010) 『Ph. P 手法によるマネジメントプロセス分析』商事法務、p.10 より引用。
- 4 「教育先進都市北区の教育が目指す子どもの姿」『北区教育ビジョン 2010』東京都北区教育委員会 (2010) 参照。

【参考文献】

成田喜一郎 (2012) 「次世代型組織マネジメント理論の構築方法」『東京学芸大学教職大学院年報第 1 集』東京学芸大学教職大学院

安田雪 (2006) 『ネットワーク分析』新曜社

戈木クレイグヒル滋子 (2007) 『グラウンテッド・セオリー・アプローチ』新曜社

開発教育協会 (2010) 『開発教育 Vol. 57』明石書店

教育先進都市

北区の教育が目指す子どもの姿

地域社会の一員としての自覚をもち

自らの力で人生を切り拓き

広く国際社会に貢献する人間の育成こそ

「教育先進都市・北区」の教育が目指すところである

1. 学びを暮らしに活かす力

～確かな学力～

* 学び喜びを体得し、知識・技能を暮らしに活かす子ども

* 多様な情報を収集・整理して自分の考えをまとめ、的確に伝える子ども

2. 自他を大切にする人間関係力

～豊かな人間性～

* 自分のよさを知り、他者の存在を認め理解し、支え合う子ども

* 常に将来への希望をもち、主体的に課題に取り組む子ども

* 何事にも挑戦し、最後までやりぬく子ども

3. 強い意思で規則正しく生活する力

～健やかな体～

* 適度な睡眠と食事をとり、生き生きと活動する子ども

* 自分の体調を知り、自分で健康管理する子ども

* 生命の大切さを深く理解し、実践する子ども

☆ 学校で取り組むべき基本方針

◇ 「学びを暮らしに活かす力」を育むために

① 子どもたちが主体的に学ぶ意欲をもち、基礎的・基本的な知識・技能が確実に定着することを目標として授業を改善する。

② 「北区基礎・基本の定着度調査」を活用し、各学年・教科で「期待正答率」を上回ることでできるよう、ICTの活用、授業形態や教材等の工夫を進める。

③ 家庭との連携を深め、家庭学習習慣の定着に努める。

④ 最低でも家庭学習時間（学年×10分）が定着するように系統的な指導を行う。

⑤ 多様なメディアを活用した読書・調査活動を推進し、総合的な読解力、情報収集・活用能力、表現力を育成する。

⑥ 新聞・インターネット・学校図書館等を活用した学習を積極的に採り入れ、自分の考えをもち、発信する力を高める。

◇ 「自他を大切にする人間関係力」を育むために

① 人権尊重の教育を推進し、児童・生徒一人ひとりが自己肯定感をもち、人の痛みがわかりあえる温かい学校づくりを目指す。

② 家庭・地域と協力し、いじめ発生数、不登校児童・生徒の出席数の減少を目指す。

③ あらゆる場面を活用して、他者の思いを理解し、自分の考えや思いを適切に伝えることのできるコミュニケーション能力を高める。

④ 学習活動全体の中で言語活動を充実し、人間関係力を高める。

⑤ 心と心が触れ合い、温かく豊かな人間関係を築くことができる体験活動を実践する。

⑥ 自然体験活動・ボランティア体験活動等を計画的に教育課程に位置付け、実践する。

◇ 「強い意思で規則正しく生活する力」を育むために

① 家庭との連携のもと「早寝・早起き・朝ごはん」を奨励し、基本的な生活習慣をしっかり身に付ける。

② 児童は8時間以上、生徒は7時間以上の睡眠をとり、毎日朝ごはんを食べてから登校するよう家庭との連携を深める。

③ 学校では、進んで挨拶をする習慣や正しい言葉遣いの定着を目指した指導を行う。

④ 体育に関する指導の充実、楽しみながら自発的に身体を動かすことのできる場面の工夫を通して体力向上を目指す。

⑤ 新体力テストの各項目において、全国及び都の平均以上の数値を目指して取り組む。

⑥ 命や健康の大切さを深く自覚できる教育を充実する。

⑦ 心の教育や健康・安全教育を系統的に推進する。